校長室だより～燦燦～ №８８０

近道はない

2023.10.24

以前、自分が作成した資料がある。そこに、こんなフレーズがあった。「国語科の授業づくりに近道はない。けれども授業改善に向けて歩んでいける道は確かにある。」

「無学年学習」という言葉を使って話すことがある。国語は、小学１年生でも、３年生でも、５年生でも、基本的に同じことをやっているのではないかという問題である。わかりやすい例がある。どの学年でも「主人公の気持ちは？」と問う。

学習指導要領では、小学１・２年生で「登場人物の行動」、小学３・４年生で「登場人物の行動や気持ち、気持ちの変化や性格」、小学５・６年生で「登場人物の相互関係や心情、人物像」となっている。中学１年生になると「登場人物の相互関係、心情の変化」、中学２年生では「登場人物の設定の仕方、言動の意味」となる。これらを系統性というのだろう。各学年ごとに、指導すべきことがある。それらを押さえて指導することが求められる。

国語では、「無目的」ということが多いように思う。とりあえず文章を書かせる。作文がいい例である。場面ごとに平板に内容を読み取っていく。今日は〇の場面というように、場面ごとに授業が進んでいく。あるいは、機械的に板書をノートやワークシートに視写するだけという場合もある。グループでの話し合いでは、それぞれの子どもが、あらかじめノートやワークシートに書き出したものを、一人ずつ読み上げるだけになっていることもある。目的が不明確なのである。意図的とは言えない。

机間指導には３つのレベルがある。子どもたちのことを見てまわってはいるが、取り組んでいるかどうかを確認しているだけで、具体的なアドバイスはない。ぐるぐるまわっているだけである。机間散歩である。これがＣレベルである。アドバイスの内容を事前に準備し、予定された子どもたちに支援している。だが、偏る傾向がある。Ｂレベルである。子どもたちの記入状況や話し合いにおける発言を瞬時に受け取り、的確なアドバイスをしている。個別のアドバイスと全体へのアナウンスを使い分けている。短時間で多くの子どもたちへの支援ができる。これには、深い教材研究と日頃からの机間指導の訓練が必要である。これが、Ａレベルである。

授業で、こんなことを聞くことがある。「何でもよいから思ったことを言ってごらん」また、事前に期待する答えを短冊等に書いておく先生がいる。それを黒板に貼っていく。大抵の場合、準備していない発言があり、手書きの板書となる。あるいは、子どもたちの発言の言葉を、ことごとく黒板に書く先生がいる。

授業者が陥りやすいことには傾向がある。傾向があるならば対策をすればよい。若い先生方が陥る前に対策を教えておけば、近道ができるのではないかと考えた。だが、現実は、そう甘くはない。やはり、近道はないのだろう。誰もが通る道ということか。問題は、陥りやすい傾向にいつまでも浸かってしまうことである。陥っているという自覚がない。人は、自覚できなければ動かない。近道はないかもしれないが、歩んでいける道ならばある。その道に案内することが責務であり、使命である。